

新型コロナ・パンデミックに思うこと

2020.09.05 守山裕次郎

昨年、中国武漢で発生した新型コロナウイルスだが、初期の当局の隠蔽により世界中に拡散し、感染者と死亡者が今も日々増加する現状にある。それにしても、オリンピックがまさか延期になるのを年初に想定した人は、恐らく皆無だったのではなかろうか。

先月、75回目の節目の終戦記念日を迎えた。そして今は新型コロナウイルスを相手に、全世界がこれとの戦いの真っ只中にある。人類とウィルスのこの戦いがいつ頃終わるのか、1年後に延期されたオリンピックがはたして開催できるのか？全く予測はできないものの、100年に一度のパンデミック危機にあたり、コロナ発生の因果関係他について考えたい。

今回、新型コロナウイルスによって、世界各国が抱えていた矛盾点や問題点が否応なく白日の下にさらけ出された。中国武漢で発生したこのウィルスだが、グローバル化の負の側面が顕在化し、これが一挙に世界中に拡散、その影響を受けていない国は皆無である。

それにしても、中国共産党の傍若無人ぶりにはあきれ果てるが、一方で、習近平体制の悪辣な本質が全世界に露呈したことは、コロナウィルスの最大の功績だったかも知れない。まさかこのパンデミック発生を想定し、中国が事前にWHOを懐柔した訳ではなかろうが、初期のテドロス事務局長との隠蔽工作の共演はほとんど犯罪に等しく、完全に機能不全に陥ったWHOから米国が脱退したのも十分に理解できる。

中国共産党の覇権主義は今に始まったわけではなく、急激な軍事力増強と共に南シナ海を埋め立て、その全域を自国の領土・領海と主張するに至った。フィリピンがこれを提訴し、2016年国際仲裁裁判所は中国の主張を全面的に退けたが、国連常任理事国との自覚もなく、「判決は紙切れに過ぎない！」と「ヤクザ国家」の声明を出し、埋め立てを続行している。

一方我が国でも、尖閣諸島への脅威は益々増加の一途をたどっており、先日は海警局の船が日本漁船を領海にまで入って追いかけて回す乱暴狼藉を働いたが、この事実を報道する既存メディアはNHKも含めてほとんどないのは何故だろうか？（中国への忖度だろう）

武漢ウィルスを世界中に拡散させ、甚大な被害を与えておきながら謝罪の一言もなく、逆に開き直って各地で紛争を起こしているのが「現代の帝国主義国家：中国」である。今回のパンデミック発生が仮に半年間遅れていたなら、この帝国主義国家の主席が4月に国賓として我が国を訪問していたことは間違いない。その場合、未来永劫に渡る我が国の歴史上、取り返しのつかない大汚点となったことだろう。（皇室までが関与するために・・・）この危機を寸前で防いだのがコロナウィルスと考えれば、その功績は実に大きい。一方、あってはならない習近平の国賓来日を画策した政府、官僚、財界等は「万死に値」する。

かつて天安門事件発生の際、中国共産党の残虐性が明らかになり、欧米各国が経済制裁を加えたが、我が国が率先し手を差し伸べたのをきっかけに、中国が再び国際社会に復帰、

その後急激な経済発展を遂げ今日に至っている。我が国は「現代の帝国主義国家：中国」の成長のアシスト役を担ったとの認識もなく、近視眼的に自分の目だけの利益を追求し、「現代のヒトラー」と言って過言でない人物を、国賓で迎える神経は理解不能である。ここまで精神的に墮落した戦後の日本人を覚醒させるため、新型コロナウイルスを使って「天罰」が下され、世界中がその巻き添えを食らったとの考えは、考えすぎだろうか？

それにしても、今回の我が国の初期対応の拙さ、危機管理のお粗末さは目を覆うばかりである。1,100万人都市の武漢が1月23日に封鎖されたが、すでにその時半数は市内を脱出しており、病院内では患者と死亡者とが混在する大混乱状態の映像が流されていた。武漢がこのような非常事態だったにもかかわらず、春節を前に湖北省だけをターゲットに我が国は入国制限をした。その結果それ以外からの多くの中国人が来日し、札幌雪祭りをはじめ全国各地での感染拡大に繋がった。(台湾の危機管理とは対照的なお粗末さだった)

入国制限に関しこの判断に至った原因は「習近平国賓来日」と「東京オリンピック開催」への配慮だったと推測される。中国全土からの入国を即刻全面的に禁止すべきだったのに、二つのイベント実施にこだわり、「国家的危機にある」との自覚もなく、国民の生命よりもこれらを優先させた誤った判断と、その後の緩慢な対応が今日の感染拡大に繋がった。

東京オリンピックが現時点で1年間延期され、来年の開催さえ危ぶまれる厳しい状況になっているが、これほどの異常事態に至った原因は、果たしてどこにあるのだろうか？

先月、75回目の節目の終戦記念日を迎えた。米国からの強い圧力で大東亜戦争に突入し、結果国土は破壊され、東京や大阪は空襲で焼け野原となり廃墟となった。民間の犠牲者は50万人～100万人、軍人の戦死者は200万人を超え、これら多くの先人たちの犠牲の上に、戦後の経済発展と今日の豊かな暮らしがあることを、改めてまず確認しておきたい。

昭和18年、戦局の悪化に伴う兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍の20歳以上の学生まで徴兵される学徒動員体制が敷かれた。10月21日「明治神宮外苑競技場」において冷たい雨が降りしきる中、首都圏77校約2万5千人のための盛大な「出陣学徒壮行会」が挙行された。出陣学徒たちは超満員の競技場で国民の大きな歓呼に応じて行進し、戦地へと赴き、その多くが犠牲となった。(行進時の彼らの心境は、如何ばかりだっただろうか・・・)

2年後の昭和20年8月15日に終戦を迎えた。なお、国民一丸となつての戦後の復興は目覚ましく、それから僅か19年後に「東京オリンピック」が開催できたのは、まさに信じられないほどの奇跡と言っても過言でない。

オリンピック開会式当日(昭和39年10月10日)、前日の雨が嘘のように晴れ上がり、国立競技場に世界各国からの選手団が集い、古関裕而作曲の「オリンピック・マーチ」とともに行進、ここに我が国の目覚ましい戦後復興を全世界にアピールすることができた。だがその時、21年前に国立競技場の前身「明治神宮外苑競技場」で、冷たい秋雨が降る中、「出陣学徒壮行会」が挙行され、オリンピック選手たちと同じ年代の若者2万5千人が、

同じく全国民の大きな期待を受けて行進し、その多くが戦死した事実をどれほどの人が記憶していただけるか？そして学徒出陣で戦死した先人たちは華やかな「平和の祭典」をあの世から眺め、何を感じ、何を思ったことだろうか？

我が国はこのオリンピック開催をきっかけに、新幹線を開通させ、高速道路網の整備を進め経済は更に成長した。その後、究極のバブル経済にまで上り詰め、昭和の終焉と共にこれが一挙に崩壊、その反動としての経済の長期低迷が令和の今日まで続いている。

このように昭和の後半 50 年近くは、戦争による荒廃～経済成長～究極のバブル経済まで「地獄と天国」両方を経験した波瀾万丈の極めて特異な時代だった。その上で言えるのは、戦後は経済成長のみに目を奪われ、海外からはエコノミックアニマルとの蔑称までもらい、日本人としての誇りや伝統、文化を大切にす精神を徐々に失っていったことである。

中でも看過できないのは、ある時期から総理の靖国神社参拝が中止されたことである。事の経緯についての詳細は省くが、近年益々反日の度合いを深めている朝日新聞が、中国に入れ知恵をし、それをきっかけに韓国までもが政治問題化させ、今日に至っている。

多くの若者たちが戦地で最期に、「靖国で会おう」との約束を交して亡くなっていった。その御霊が祀られている靖国神社に誰が参ろうと、中国や韓国に文句を言われる筋合いは全くない。（内政干渉そのものである）祖国のために命をかけて戦った先人たちとの約束を反故にして、中国や韓国などの顔色を伺う今日の政治家、官僚、財界、マスメディア等々彼らは、それで恥ずかしくないのだろうか？先人たちに顔向けできるのだろうか？

今回のコロナ騒動がなければ、この 7 月に 2 度目の東京オリンピックが開催されていた。立派な新国立競技場その他の施設が完成し、全世界から選手団と多くの観光客が来日して、国内的にも大いに盛り上がるはずだったが、コロナ騒動で 1 年間延期になり、来年の開催さえ危ぶまれるのが今日の状況である。

戦後僅か 19 年での前回東京オリンピックは、多くの戦没者の犠牲の上での開催だった。その後の経済成長も今日の平和と繁栄も、すべてはその延長にある。それをすっかり忘れ、英霊が祀られている靖国神社に総理が参拝しない国に、2 度目のオリンピックを開催する資格はない！との「天の声」を、コロナウィルスを使って知らせたのではなからうか。

話をコロナ騒動に戻したい。今回のパンデミックで判ったことは、過度のグローバル化が国を危うくする現実と、我が国のデジタル化が遅れていることが露呈したことである。

生活用品から自動車部品その他工業資材まで、中国にその多くを依存している現状から早急に脱皮する必要がある。加えて、激化する米中対立の中で、米国の逆鱗に触れたなら、例えトヨタでも米国での今後の企業活動に支障をきたすとの危機感を持つべきだろう。

一方で、我が国のデジタル化の大きな遅れも顕在化した。マイナンバー制度が充実していたならば、支給金の給付も速やかにできただろうに・・・更にはテレワークやオンライン授業、オンライン診療等々、ほとんど進まなかったこれらシステムだが、必要に駆られて

進捗する結果となり、この流れはアフターコロナ時代にも後退することはないだろう。

今回のコロナ騒動で我々は多くのことを知ることができた。最大のものは、中国の隠蔽体質、覇権主義、帝国主義の実態が、全世界の前に露呈したことである。武漢で発生したウィルスは自然界の法則に従い、何らの忖度もなしに全世界に拡散し、人々を感染させた。例え、相手が英国王室関係者や首相であろうと、ブラジル大統領であろうとも・・・

一方同じ中国発でも、人為的な C 国ウィルスは何十年も前から全世界に拡散しており、ここにきてようやく米国や豪州がその汚染の深刻さに気がついたが、スパイ防止法さえもない我が国などは政・官・財・マスメディア等、すでに多方面に深く静かに浸透していることは間違いない。最近、秋元議員が IR 収賄汚職事件で逮捕されたが、彼など序の口以下、氷山のほんの一角で、自民党の大物議員も含め、その汚染の深刻さは容易に想像される。

この人為的な C 国ウィルスに加えて、遙か昔から存在している K 国のウィルスもあり、それらが政・官・財・メディア等に深く浸透し、結果として憲法改正やスパイ防止法等の議論さえ妨害して、我が国を真っ当な国にさせない抵抗勢力として多く存在するが、この現実には多くの国民は早急に目覚める必要がある。(長年にわたる「平和呆け」からの覚醒)

戦後 75 年が過ぎた現在、最大の課題は我が国の素晴らしい伝統や文化を守り、次世代に伝承することにある。人生は「エンドレスの駅伝」にも例えることができる。先人たちが必死に脈々と今日まで繋いだタスキである。この血と汗と涙の染みついたタスキを次世代にしっかり繋ぐ責任が我々にはある。そのことを自覚して、残された人生を過ごしたい。

(追記)

フィリピン・ルバング島のジャングルで、終戦を知らずに昭和 49 年まで戦った小野田寛郎元陸軍少尉の下記心境を知って欲しい。彼の生き方は日本人以外にはあり得ない。

「私は 15 年間、靖国神社に祀られていた身分です。そのままだったら今の日本の姿を知る由もなかった。国が靖国を護持しないというなら、それは私たちに対する借金を返さず、未納のままということ。また別の施設を造るということは私たちに対する裏切り行為です。とても許されることではありません。靖国参拝は当たり前のことであって、あれこれ言う人はもうどうでもいい。いやなら参拝は結構だと言いたい。そもそも、色々なわだかまりがあったから戦争になったのであり、それをわだかまりが無いという方に無理があるのですから、綺麗事はどうでもいいのです。A 級戦犯が祀られているから、ということと言う人もいますが、あの裁判は占領中に行われたことであり、彼らはその中で命を落とした人たちなのです。日本人は亡くなった人に対し、それ以上は罪を憎まないという習慣がある。しかし、中国は死んだ後も罪人のままで、墓まで暴かれてしまいます。その中国の価値観を我々が受け入れなければならないのでしょうか。一度黙って、静かにお参りしてみたらどうですか。戦争で死んだ人は若い人が多かった。肉親が元気なうちは手厚く祀ってもらえるが、肉親がいなくなった後に祀られる場所は靖国しかないのです。」

以上